

〔釋日本紀述義〕攝津國風土記曰、有馬郡又有鹽之原山、此近在鹽湯、此邊因以爲名、久牟知川、右因山爲名、山本名功地山、昔難波長樂豐前宮御宇天皇世、爲車駕幸温泉、作行宮於湯泉之、于時採材木於久牟知山、其材木美麗、於是勅云、此山有功之山、因號功地山、俗人彌誤曰久牟知山、又曰始得見鹽湯等云々、土人云、不知時世之號名、但知島大臣時耳、

〔空穂物語藏開下〕かのおと、九の君おはします、こだちいとおほくさぶらふ、かくてゆきまさつのおくありまのゆがりいきて、おもしろき所々ありきて、おしき所々みるにも、物思いでられつ、哀とおぼゆるときに、

まほたる、ことこそまされ世中を思なかつのはまかはなくて

〔榮花物語二十七〕其のち兵衛督公信原もの、み心ぼそくおぼえて、こ、ちもれいならず覺え給ければ、風などいひければ、ありまへといでたち給へど、此ひめぎみのうしろめたさに、えおはせですぐし給ける、

〔古今著聞集二〕行基菩薩もろくの病人をたすけんがために、有馬の温泉にむかひ給ふに、武庫山の中に壹人の病者ふしたり、上人あはれみをたれてとひ給ふやう、汝なに、よりにか此山の中にふしたる、病者答ていはく、病身をたすけんために温泉へむかひ侍る、筋力絶盡て前途達しがたくして、山中にとまる間、糧食あたふるものなくして、やうく日數ををくれり、ねがはくは上人あはれみをたれて、身命をたすけて給へと申、上人此言葉を聞て、いよく悲歎の心ふかし、則我食をあたへて、つきそひてやしなひ給ふに、病者いはく、われあざやかなる魚肉にあらでは、まよよくする事をえずと、是によりて長淵のはまに至りて、なましき魚を求めてこれをす、め給ふに、同じくは味をと、のえてあたへ給へと申せば、上人みづから鹽梅をして、其魚味をこ、ろみて、あぢはひと、のふる時す、め給ふに、病者はをぶくす、かくて日を送る、又云、我病温泉の